



「匠の技」を、守れ!

…日経新聞に特集記事がございました!

私は個人的に「和竿」については、“山野正幸”40歳を勇逸の継承人として微力ながら支援をさせて頂いております。

<記事の抜粋>

江戸で五代続く「和竿」の老舗“竿忠”中根喜三郎さん(75歳)が語る。
 明治の元老が住み込み「和竿」を仕上げていた歴史を持つ店にも、後継者はいない。
 「販売先の減少」・「後継者いない」・「質の良い材料の減少」と、原因を挙げている。

このように、現在の和竿伝統工芸師は川口を含めても最年少が「73歳」なのです。そこで、ただ一人継承する事に意義を感じている“山野正幸”を支援したいのです。皆様も日本の伝統文化を絶やさぬように、御支援を宜しくお願い申し上げます。

東京の主な伝統工芸品

江戸切子	創始者は加賀屋久兵衛。大正から昭和にかけて急速に発展。菊、籠(かご)目などの柄が特長
江戸和竿	江戸・享保年間に天然竹の「継ぎ竿」が作られ始める。全工程は120にも
東京桐箆笥(きりたんす)	防湿性・耐火性に優れ丈夫で繊細な作りは大名屋敷や商家などに愛された
東京銀器	1867年のパリ万博で評価を高める。江戸中期には町人も広く使用
東京手描友禅	江戸時代、大名のお抱え染師が移住した。明るい色彩と斬新なデザインが持ち味
東京手植ブラシ	開国とともに欧米人向けブラシの需要が増加。密な植毛が味わい深い

この特集記事での東京・工芸が絶えると思われる工芸品は、左の表にございます。

*「和竿」工芸を広める意味で、“山野正幸”氏は努力・辛抱を重ねながら、積極的に全国の百貨店にて開催される職人展に参加を試みておりますが、実績を見る限り利益を生み出すほどの売上げを頂けていないのが現状でございます。

*私が無理やりに一般的に「和竿」工芸を広める意味で、種々の展示会出るべきと後押しをしていますが、稼ぎに繋がらないのが現状です。ただ、10年先には“山野正幸”一人だけが「和竿伝統工芸師」として、存在の可能性がありますので御支援を宜しくお願い申し上げます。

“昭山正幸”ブランド構築中!



邪道ではございますが「和竿」でなくて、その匠の技を活かした「工芸・竹パター」・「工芸・竹ステッキ」などの開発プロデュースを私レベルで進めておまして、「和竿」工芸継承の為の生活安定基盤の構築を微力ながらお手伝いが出来ればと考えております。

もし、釣り好きの方で「本物の和竿」の使用をお考えの方は、是非“山野正幸”作品のご愛用を宜しくお願い申し上げます。…釣具「上州屋」の和竿コーナーにても、販売されております。